

エンジニアパーク

Engineer Ring Park

大学3年の時に履修した海岸工学の講義において、その講義内容のわかり易さ、面白さに感銘を受け、海岸工学に興味を抱き、この道を専攻しました。そして、漁港、港湾、海岸を専門とする現在の勤務先に、2003年(平成15年)に入社しました。以来約12年、漁港や海岸における調査の業務に携わり、漁港や海岸が抱える諸問題を解決すべく奮闘してきました。調査では、船に乗って、地形の計測や観測機器の設置等を行い、得られたデータの分析を行っています。ただ、12年経った今でも、“海洋の複雑さ”と“船の揺れ”には慣れていません。

「港湾工学の父」と呼ばれた廣井勇博士は、100年以上前のまだ設計技術・施工技術が確立されていなかった時代に、小樽港北防波堤を完成させました。そして、この構造物は現在でも当時のまま使われており、廣井博士の独創性と技術の真価が発揮された賜物として土木遺産に選ばれています。ここで、この築港にとって重要となったのは、豊富な知識と経験によって培われた「物差し(感覚)」であったと考えます。優れた技術者は、物事を感覚的に正しいか誤っているかのみならず、定量的にも判断でき、実証的に見ても概ね同じ解になります。これは動物的な感覚とは違い、知識と経験から研ぎ澄まされた技術者の持つ物差しによるもので、まさしく技術士に問われるスキルであると感じています。

技術は日々進歩していますが、その中でも不変的な技術は継承し、新しい技術は積極的に取り入れて、引き続き漁港や港湾、海岸の諸問題に立ち向かっていきたいと思います。また、技術士として自己研鑽に励んで、自分の物差し(感覚)を研ぎ澄ましていきたいと思います。

佐野 朝昭 (さの ともあき)

●水産部門(水産土木)

勤務先

株式会社
アルファ水工コンサルタンツ



→次号は、八木澤一城さん(水産部門)

突然だが「地質リスク」の話をさせていただく。私が2010年(平成22年)に立ち上がった地質リスク学会の「地質リスクマネジメント事例研究発表会活性化委員」という長い名称の委員に任ぜられたのが2012-2013年(平成24-25年)のこと。委員会解散後は全国地質調査業協会連合会から「地質リスクキーマン」というピーマン入りキーマカレーのような肩書きが与えられている。よって私はカレーの作り方、もとい、地質リスクを宣伝せねばならぬ。さて地質リスクとはなんぞや？

地質は、インフラ整備事業を制約する重要な因子の一つである。しかし大部分が地中であって目に見えない不確実なものであるため、事業を計画する際には軽視されがちである。その結果、地すべりに阻まれて何時になっても開通しない道路や、活断層があるかもしれないので稼働できない発電所、といった事業が展開され、コストが増え続け便益は還元されない。計画時には楽観的に解釈された、地質が抱えるリスクが後になって牙を剥き、我々を、我々の財布を、打ちのめしている。

そこで出てくるのが地質リスクマネジメントの概念である。適切な段階で地質調査コストを投資して地質が抱えるリスクを評価し、トータルコスト縮減を図るといふ、当たり前のマネジメント。しかし現在の地質調査は、設計するためにやむをえず行うものという認識が強く、設計を肉に例えるなら皿の端に除けられるピーマンさながらである。このままでは適切な時期のコスト投資はためられ、地質リスクは解消されず、カレーは単調な味わいに終始するであろう。適切な段階からじっくりコトコト煮込むからこそ、ピーマンは挽肉と絶妙なハーモニーを…

寺井 康文 (てらい やすふみ)

●応用理学部門(地質)

勤務先

大地コンサルタント株式会社
terai@daitch.co.jp



→次号は、本間宏樹さん(応用理学)